

障害者が地域社会と共生できる多機能型事業所への挑戦。

これまで障害者は家族と離れて施設の中で暮らすか、家の中にとどまり社会との交流がないことが多かった。彼らが家族や地域社会との関わり合いを回復することが、これからの障害者福祉には求められている。NPO 法人「そよかぜの家」は、このような時代の要請に応える多機能型事業所をめざしている。

通所することによって
家族と暮らせるシステムをつくらう。

安比高原スキー場で有名な岩手県の八幡平(はちまんなたい)市は、2005年に西根町、松尾村、安代町が合併して誕生した。岩手山を眺望するこの自然豊かな町に「そよかぜの家」がある。さまざまな障害を持つ人たちが自立のための支援を受けるB型就労継続支援施設である。身体、精神、知能の3障害や重度障害者への対応を行う多機能型事業所であり利用者の年齢も幅広いのが特徴的である。

同施設を運営しているNPO 法人 そよかぜの家 会長の伊藤昇さんは「障害を分け隔てなく見守っていきたいのです。そして、これまではそれぞれの施設に入れなければならなかった人たちを通所することによって、なんとか家族のそばで暮らせるようにしたいというのが基本的な考え方です」と説明する。

家族にとっても、障害者の状況がいつも把握できている方がよい。伊藤さんたちの考え方は共感呼んで、他の施設から移動してくる利用者も多くなっていった。合併前、松尾村での小規模作業所時代は12名であった利用者が今は倍以上の人数である。この傾向はさらに強まると見られ、そうすると障害の度合いなどによって活動内容を変える必要もでてくる。

施設と建物自体は八幡平市から低コストで借りているのだが、環境を整えるための改装を行う資金がなかった。多機能型事業所へ向けて、伊藤さんはあちらこちら



施設の外観：改装し快適な生活空間に生まれ変わった

へ陳情に赴いた。しかし、経済不況でどこも反応はにぶい。あきらめかけたところで、全日本社会貢献団体機構と岩手県遊技業協同組合の支援を受けることができ、助成金の一部を改装費用にあてた。

「AJOSC さんだけでなく、地元の県遊協さんのご理解をいただいたことは大変意義深いことだと思います。



ラジオ体操で体をほぐし作業に備える



子供向けのアクセサリやパッチワークを作る利用者

授産施設としてこれからも関係を深めていければと考えています」と伊藤さんは嬉しそうに語った。

この改装によって、重度障害者のための作業室と車いすの方が使えるトイレやお風呂も整備でき、快適な生活空間に生まれ変わるとともに、地域社会との共生のための基盤ができた。

生で見るコンサートに全員が大興奮。

「そよかぜの家」は朝9時30分の朝礼とラジオ体操から始まる。昼食や休憩をはさんで午前と午後に各自が作業を行う。障害の軽い就労支援B型に属する人たちは、子ども向けのアクセサリやパッチワークづくりなどに取り組む。障害の種類によって当然差異はあるものの、なかなか手慣れた手つきである。

重度の人たちは新しくできた部屋で、それぞれの能力を伸ばすためのリハビリや訓練を行っていた。パズルをする人、計算をする人、授産作業の一部を行う人、さまざまである。何かを完成したときの達成感は健常者となんら変わることはない。「毎日ここに来て、みんなと顔をあわせて作業するのが楽しみ」と利用者は話す。

それを見守るスタッフたちは「いつか社会の中で自立して生きていけるようなスキルと希望をもってもらいた



コンサート後、マンドリンシンガーの清心さんと記念撮影

担当者より



利用者が増え、
笑い声も広がっています。

NPO 法人 そよかぜの家 会長
伊藤 昇さん

周囲も私自身もあきらめかけていた中で、AJOSC と岩手県遊協の皆様よりご助成いただき、たいへんあり難く思っております。利用者たちの喜ぶ姿を見るにつけ、感謝の気持ちでいっぱいになります。その後、人数も増えましたがあと20名程度は受け入れられるようになりました。今後とも頑張りますのでどうか見守っていただければと思います。

いし、重度であっても自信をつけ、生きがいを持ってもらいたいと思っています。「そよかぜの家」は彼らと社会の接点なのです」と語ってくれた。

今回の助成は、そうした社会との接点としての活動にも利用された。一つはマンドリンシンガーの清心(きよみ)さんを招いてのコンサートである。間近で見るプロの生演奏に全員が大興奮。「こんなにきれいな人がいるんだなあ」「一緒にやった手話をもっともっと練習しておけば良かった」という声があがった。

そしてもう一つはスポーツ活動である。特に「フライングディスク」と呼ばれる競技は優秀で、全国障害者スポーツ大会では4年連続して岩手県代表として全国大会に出場するほどの成績をあげている。

「そよかぜの家」の取り組みは、国などの福祉行政の方針とも合致するもので、今後も増えていくと考えられる。しかし、ただ施設を整えるだけでは機能しない。障害者を見守る気持ちを地域に根付かせることが肝心なのである。その点で「そよかぜの家」は他地域にとっても格好のお手本になりそうだ。

岩手県遊技業協同組合から

八幡平市は盛岡からも離れていますので、福祉の面ではやや遅れ気味という感じがありました。授産施設と我々は深い関係にあり、お手伝いをさせていただくことにしました。